

二〇一八年度

二月三日午後入試（第五回）

国語（45分）

注意 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。

2 答えはすべて解答题紙の解答らんには、はっきり書きなさい。

3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。

4 問題のページは、5-1 から 5-10 まであります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

① この春、僕はまえから一種の憧れをもっていた馬酔木の花を大和路のいたるところで見ることができた。そのなかでも一番印象ぶかったのは、奈良へ着いたすぐそのあくる朝、途中の山道に咲いていた蒲公英や薺のような花にもひとり目に目がとまって、なんとなく懐かしいような旅びとらしい気分、二時間あまりも歩きつづけたのち、漸々とたどりついた浄瑠璃寺の小さな門のかたわらに、丁度いまをさかりと咲いていた一本の馬酔木をふと見いだしたときだった。

② 最初、僕たちはその何の構えもない小さな門を寺の門だとは気づかず、危うく其処を通りこしそうになった。その途端、その門の奥のほうの、一本の花ざかりの緋桃の木のうえに、突然なんだかはとすようなもの、——ふいとそのあたりを翔け去ったこの世ならぬ美しい色をした鳥の翼のようなものが、自分の目にはいつて、おやと思つて、そこに足を止めた。それが浄瑠璃寺の塔の鑄ついた九輪だったのである。

なにもかかもが思いがけなかった。——さつき、坂の下の軒家のほとりで水菜を洗っていた一人の娘にたずねてみると、「九体寺やったら、あこの坂を上りなはつて、二丁ほどです。」と、その家で寺をたずねる旅びとも少なくはないと見えて、いかにもはきはきと教えてくれたので、僕たちはそのかなり長い急な坂を息をはずませながら上りきつて、さあもうすこしと思つて、僕たちの目のまえに急に立ちあらわれた一かたまりの部落とその菜畑を何気なく見過ごしながら、心もち先をいそいでいた。あちこちに桃や桜の花がさき、一めに菜の花が満開で、あまつさえ向こうの藁屋根の下からは七面鳥の啼きこえさえのんびりと聞こえていて、——まさかこんな田園風景のまっただ中に、その有名な古寺が——はるばると僕たちがその名にふさわしい物古りた姿を慕いながら山道を骨折つてやってきた当の寺があるとは思えなかったのである……。

④ 「なあんだ、ここが浄瑠璃寺らしいぞ。」僕は突然足をとめて、声ははずませながら言った。「ほら、あそこに塔が見える。」

⑤ 「まあ本当に……。」妻もすこし顔つきをしていた。

「なんだかちつともお寺みたいではないのね。」

「うん。」僕はそう返事ともつかずに言つたまま、桃やら桜やらまた松の木の間などを、その突きあたりに見える小さな門のほうに向かつて往つた。何処かでもまた七面鳥が啼いていた。

⑥ その小さな門の中へ、石段を二つ三つ上がつて、はいりかけながら、「ああ、こんなところに馬酔木が咲いている。」と僕はその門のかたわらに、丁度その門と殆ど同じくらしいの高さに伸びた一本の灌木がいちめに細かな白い花をふさふさと垂らしているのを認めると、自分のあとからくる妻のほうを向いて、得意そうにそれを指さして見せた。

「まあ、これがあなたの大好きな馬酔木の花？」妻もその灌木のそばに寄つてきながら、その細かな白い花を仔細に見ていたが、しまいには、なんとということもなしに、そのふっさり垂れた一塊を掌のうえに載せたりしてみていた。

どこか犯しがたい気品がある、それでいて、どうにでもしてそれを手折つて、ちよつと人に見せたいような、いじらしい風情をした花だ。云わば、この花のそんなところが、花というものが今よりかずつと意味ぶかかった万葉びとたちに、ただ綺麗なものでもっと他にもあるのに、それらのどの花にも増して、いたく愛せられていたのだ。——そんなことを自分の傍でもつてさつきからいかに無心そうに妻のしだしている手まさぐりから僕はふいと、思い出していた。

「何をいつまでもそうしているのだ。」僕はとうとうそう言いながら、妻を促した。
僕は再び言った。「おい、こっちにいい池があるから、来てごらん。」

「まあ、ずいぶん古そうな池ね。」妻はすぐついて来た。「あれはみんな睡蓮ですか？」

「そうらしいな。」そう僕はいい加減な返事をしながら、その池の向こうに見えている阿弥陀堂を熱心に眺めだしていた。

⑦ 阿弥陀堂へ僕たちを案内してくれたのは、寺僧ではなく、その娘らしい、十六、七の、ジャケット姿の少女だった。

うすぐらい堂のなかにずらりと並んでいる金色の九体仏を一わたり見てしまうと、こんどは一つ一つ丹念にそれを見はじめている僕をそこに残して、妻はその寺の娘とともに堂のそとに出て、陽あたりのいい縁さきで、裏庭の方かなんぞを眺めながら、こんな会話をしあっている。

「ずいぶん大きな柿の木ね。」妻の声がする。

「ほんまにええ柿の木やろ。」少女の返事はいかにも得意そうだ。

「何本あるのかしら？ 一本、二本、三本……。」

「みんなで七本です。七本ですが、沢山に成りまっせ。九体寺の柿やいうてな、それを目あてに、人はんが大ぜいハイキングに来やります。あてが一人で腕いで上げるのですがなあ、そのときのせわしい事やったらおまへんなあ。」

「そうお。その時分、柿を食べにきたいわね。」

「ほんまに、秋にまたお出でなはれ。この頃は一番あきまへん。なあも無うて……。」

⑧ 「でも、いろんな花がさいていて。綺麗ね……。」

「そうです。いまはほんまに綺麗やろ。そやけれど、あこの菖蒲の咲くころもよろしいおまっせ。それからまた、夏になるとなあ、あこの睡蓮が、それはそれは綺麗な花をさかさまっせ……。」そう言いながら、急に少女は何かを思い出したようにひとりごちた。「ああ、そやそや、葱とりに往かにやならんかった。」

「そうだったの、それは悪かったわね。はやく往つてらっしやいよ。」

「まあ、あとでもええわ。」

それから二人は急に黙ってしまった。

僕はそういう二人の話を耳にはさみながら、九体仏をすっかり見おわると、堂のそとに出て、その縁さきから蓮池のほうをいっしょに眺めている二人の方へ近づいていった。

僕は堂の扉を締めに行った少女と入れかわりに、妻のそばになんとということもなしに立った。

「もう、およろしいの？」

「ああ。」そう言いながら、僕はしばらくぼんやりと観仏に疲れた目を蓮池のほうへやっていた。

少女が堂の扉を締めおわって、大きな鍵を手にしたが、戻ってきたので、

「どうもありがとう。」と言って、さあ、もう少女を自由にさせてやろうと妻に目くばせをした。

「あこの塔も見なはんなら、御案内しまっせ。」少女は池の向こうの、松林のなかに、いかにもさわやかに立っている三重塔のほうへ僕たちを促した。

「そうだな、ついだから見せて貰おうか。」僕は答えた。「でも、君は用があるんなら、さきはその用をすましてきたらどうだい？」

⑨ 「あとでもええことです。」少女はもうその事はけろりとしているようだった。

ともなしにこうして歩いてみるのをこんどの旅の愉しみにして来たことさえ、すこしももう考えようともしなくなっているほど、——少なくとも、僕の心は疲れた身体とともにぼおつとしてしまっていた。

突然、妻がいった。

「なんだか、この馬酔木と、浄瑠璃寺にあったのとは、すこしちがうんじゃない？　ここのは、こんなに真っ白だけれど、あそこのはもつと房が大きくて、うっすらと紅味を帯びていたわ……。」

「そうかなあ。僕にはおんなじにしか見えないが……。」僕はすこし面倒くさそうに、妻が手ぐりよせているその一枝へ目をやっていたが、「そういえば、すこし……。」

そう言いかけながら、僕はそのときふいと、ひどく疲れて何もかもが妙にぼおつとしていている心のうちに、きょうの昼つきた、浄瑠璃寺の小さな門のそばでしばらく妻と二人でその白い小さな花を手にとりあって見ていた自分たちの旅すがたを、何だかそれがずっと昔の日の自分たちのことでもあるかのような、

でもって、鮮やかに蘇らせ出していた。

（堀辰雄「浄瑠璃寺の春」『大和路・信濃路』より 一部改変）

※（注）大和路——京都から奈良に通じる道。

九輪——塔の上部にある九つの輪の飾り。

九体寺——浄瑠璃寺のこと。京都にある寺。阿弥陀如来を九体安置することから九体寺ともいう。

二丁——距離を表す。一丁は約109m。

モニユメント——過去の人類が残した遺構。

廃墟——建物などがあはれた跡。

パステイック——あわれでいたましいさま。

ジムメル——ドイツ出身の哲学者、社会学者。

現実的——現実を忘れて想像をめぐらす状態におちいること。

問一——線①「この春、僕はまえから一種の憧れをもっていた馬酔木の花を大和路のいたるところで見ることができた。」とありますが、「僕」が「大和路のいたるところ」で見た「馬酔木の花」の中で最も印象深かったのは、どこにあった「馬酔木の花」ですか。文中から十四字でぬき出して答えなさい。

問二——線②「最初、僕たちはその何の構えもない小さな門を寺の門だとは気づかずに危うく其処を通りこしそうになった。」とありますが、「僕たち」が「何の構えもない小さな門」を寺の門だとは「気づかず」に「通りこしそうになった」のはなぜですか。その理由が書かれている部分を文中から一文でぬき出し、その初めの五字を答えなさい。

問三 —— 線③ 「その家で寺をたずねる旅びとも少くはない」とありますが、どういう意味ですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア この家で浄瑠璃寺じょうるりじの場所を聞く旅びとがかなりいるということ。
- イ この家で浄瑠璃寺の場所を聞く旅びとが少ないということ。
- ウ この家を浄瑠璃寺だと思いいこむ旅びとが多いということ。
- エ この家を浄瑠璃寺だと思いいこむ旅びとは全くないということ。

問四 —— 線④ 『なあんだ、ここが浄瑠璃寺らしいぞ。僕は突然足をとめて、声はずませながら言った。』からわかる「僕」の気持ちとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 浄瑠璃寺がすぐに見つかったことに對して安心する気持ち。
- イ 浄瑠璃寺によくたどりついたことに對する喜びの気持ち。
- ウ 浄瑠璃寺が想像よりみすばらしいことに對してがっかりする気持ち。
- エ 浄瑠璃寺を親切に教えてくれた村の娘むすめに對する感謝の気持ち。

問五 —— 線⑤ 「妻もすこし 顔つきをしていた。」の にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 困ったような
- イ 不満なような
- ウ 意外なような
- エ 納得なっとくしたような

問六 —— 線⑥ 「ああ、こんなところに馬酔木あしびが咲いている。」について、次の1～3の問いに答えなさい。

- 1 この言葉にこめられた「僕」の気持ちを考えて五字以内で答えなさい。
- 2 「馬酔木の花」とは、どのような花ですか。花の形状を説明した部分を文中から二十字以内でぬき出して答えなさい。
- 3 「僕」は馬酔木の花のどのようなおもむきに心ひかれていますか。それが述べられている部分を一文でぬき出し、初めの五字を答えなさい。

問七 —— 線⑦「阿弥陀堂へ僕たちを案内してくれたのは、寺僧ではなく、その娘らしい、十六、七の、ジャケット姿の少女だった。」とありますが、「僕」はこの後「ジャケット姿の少女」に対してどのような印象を持ちますか。文中から十字以内でぬき出して答えなさい。

問八 —— 線⑧「そうだとす。いまはほんまに綺麗やろ。そやけれど、あこの菖蒲の咲くころもよろしいおまつせ。それからまた、夏になるとなあ、あこの睡蓮が、それはそれは綺麗な花をさかせまつせ……。」とありますが、ここからわかる寺の娘の気持ちとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア この寺には季節ごとに実をみのらせる果実がないことを詫びる気持ち。
- イ この寺に咲いている花に話題を移して妻の気を逸らそうとする気持ち。
- ウ この寺では季節ごとに美しい花が咲くことを自慢したくてたまらない気持ち。
- エ この寺では柿の実の成る秋の季節が一番美しいと誇りたい気持ち。

問九 —— 線⑨「少女はもうその事はけろりとしていているようだった。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

- 1 「けろりとしている」とは、どのような様子を表していますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号で答えなさい。
 - ア 今まであったことをすっかり忘れている様子。
 - イ 嫌な気分をきれいさっぱりと水に流す様子。
 - ウ 無理やり思い出さないように心を配る様子。
 - エ 用事のこととは全く気にしていない様子。
- 2 このことから分かる「少女」の性格として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 何事も後回しにするおっとりとのんびりした性格。
- イ 何事にも細かく念入りできちょうめんな性格。
- ウ ものにこだわらずさっぱりとおおらかな性格。
- エ ものに対しておどおどとしておくびような性格。

問十 —— 線⑩「そういうこのあたりすべてのものが、かつての寺だったそのおおかたが既に廃滅してわずかに残っているきりの二三の古い堂塔をとりかこみながら」とありますが、現在「わずかに残って」いる「二三の古い堂塔」をとりかこむ「そういうこのあたりすべてのもの」の雰囲気や「僕」は何と表現していますか。文中から五字でぬき出して答えなさい。

問十一——線⑪「其処そこにその二つのものが一つになって——いわば、第二の自然が発生する。」とは、どういふことを言っていますか。次のア／エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 第二の自然は、人間の創造物の中で年月を経るうちに辛からうじて形を残すものが、あたかもどこからある自然の一部であるかのようにそこに融とけ込んで生まれるものだという事。

イ 第二の自然は、自然を超えようとして人間が意志したすべてのものが、もともとある自然をおおいつくし、その自然を破壊はかいしたときに生まれるものだということ。

ウ 第二の自然は、長い年月をかけて崩れ去った建造物が、人間の知恵ちえによって新たに復元されたときに周りの自然と人工物が対立する形で生まれるものだという事。

エ 第二の自然は、そこで生きる人間の生活の一片いっぺんであるかのように自然がさりげなく寄りそう形で存在するときに、悲愴ひそつてき的な懐古かいこ的気分を漂たなわせて生まれるものだという事。

問十二——線⑫「こうして廢塔はいとうといつしよに、さつきからいくぶん瞑想的めいそうてきになりがちな僕ぼくもしばらく世間のすべてのものから忘れ去られている。」とありますが、「僕」が「しばらく世間のすべてのものから忘れ去られている」とは、どういふことを言っていますか。次のア／エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 僕がしばらくの間、世間のすべての記憶きおくがなくなった状態にあること。

イ 僕がしばらくの間、世間の人々の記憶から消し去られている状態にあること。

ウ 僕がしばらくの間、世間の人々との結びつきが薄うすい状態にあること。

エ 僕がしばらくの間、世間のすべてのことから遠く離はなれた状態にあること。

問十三——線⑬「なんだか僕はこのまますこし気が遠くなってゆきそうだ……。」とは、「僕」のどのような状態を表していますか。次のア／エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 僕の意識がだんだん遠のき、意識不明になりそうな状態。

イ 僕の意識が空中をさまよい、疲れが身体からだ全体をおおう状態。

ウ 僕の意識が現実を離れて、想像の世界に入り込んでいく状態。

エ 僕の意識自体ははっきりしているが、ものを考えられない状態。

問十四——線⑭「この馬酔木あしびと、浄瑠璃寺じょうるりじにあったのとは、すこしちがうんじゃない？」とありますが、「妻」は「浄瑠璃寺」と「ここ」の馬酔木は何がちがっていると気づきましたか。二点答えなさい。

問五 —— 線⑮「何だかそれがずっと昔の日の自分たちのことでもあるかのような、でもって、鮮やかに蘇らせ出していた。」のには、この時の「僕」の心を反映する言葉が入ります。最もよくあてはまる言葉を次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 妙なあたたかさ
- イ 妙ななつかしさ
- ウ 妙なやさしさ
- エ 妙なうらめしさ

問六 「僕」の性格の傾向としてあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 外交的
- イ 内省的
- ウ 現実的
- エ 楽観的

問七 「僕」にとって馬酔木の花とはどのような存在だと考えられますか。次のア～エの中からあてはまるものを二つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 僕にかぎりない美とやすらぎをもたらし僕の人生を豊かにしてくれる存在。
- イ 僕の意識を現実から遠ざけ、かぎりなくふるさとを思い起こさせる存在。
- ウ 僕の感受性を刺激し、詩や評論、小説にわたる執筆活動の助けとなる存在。
- エ 僕が生きている現在の場から、思いを寄せる古代の場へ運んでくれる存在。

問八 本文の内容としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 僕は古寺の魅力を最終的にはすべてが崩れ去り自然に融け込み、自然の元に還っていく過程にあると考えている。
- イ 僕はしばらく奈良の古寺を歩いているうちに、時間や空間をさかのぼって物事を捉え思いを巡らせている。
- ウ 妻と浄瑠璃寺の娘の興味は、浄瑠璃寺の建造物や寺宝よりも食べ物などの現実の世界に終始している。
- エ 浄瑠璃寺の門のそばで馬酔木の花を見ていると、昔、妻と二人で浄瑠璃寺を訪ねた日の記憶が懐かしく蘇る。

二 次の漢字に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① クシンして完成させた作品。
- ② ドクゼンのな考え方はよくない。
- ③ 仕事のヨウリヨウを得る。
- ④ 科学ギジュツの進歩はめざましい。
- ⑤ 畑をコウサクする。

問二 次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 大学で学問を修める。
- ② 福岡県は有名な炭田地帯だった。
- ③ ほかの人を退けて話をする。
- ④ 山腹までたどり着く。
- ⑤ 台風に備えておく。

問三 次の①・②の漢字の矢じるしで示した部分は、筆順で何画目に書けばよいですか。漢数字で答えなさい。

① 除

② 律

三 次の言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～③の対義語をそれぞれ漢字二字で答えなさい。

- ① 祖先
- ② 義務
- ③ 人工

問二 次の①～⑤の文の——線部と同じ意味で使われているものをそれぞれ後のア～エの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① 学生らしいふるまいを学ぶ。

ア どうやら明日は残念ながら雨らしい。

イ あの背の高い人が彼の父親らしい。

ウ この寒さはいかにも北国らしい。

エ 君はそのままですばらしい。

② 歩くと一時間以上かかりそうだ。

ア 新しい担任の先生はとても厳しそうだ。

イ 山本さんは早めに来られるそうだ。

ウ 清水さんはアメリカの中学校に進学するそうだ。

エ この町は夜もにぎやかだそうだ。

③ このセーターは私のです。

ア 私のかばんは右です。

イ 試合に負けたのがくやしい。

ウ あなたの妹は何年生ですか。

エ 魚の住むことができる川を残したい。

④ 外に出ると思いのほか寒かった。

ア わかりましたと彼女は元気に答えた。

イ 姉と妹がけんかをする。

ウ じつと夜空をながめていた。

エ チャイムが鳴ると生徒は静かになった。

⑤ 午後は買い物にでかける。

ア 校庭に集まった。

イ 船はまっすぐ南に進む。

ウ 図書館へ勉強に行こう。

エ クラスの代表になる。